

## 2. 大学改革支援・学位授与機構による学部・研究科の教育及び研究に関する 現況分析結果（評価結果案\*1）

### 生物生産学部（教育）

教育活動の状況		教育成果の状況		質の向上度
期待される水準を上回る		期待される水準にある		質を維持している
教育実施体制	教育内容・方法	学業の成果	進路就職の状況	
期待される水準 にある	期待される水準 を上回る	期待される水準 にある	期待される水準 にある	

### 生物圏科学研究科（教育）

教育活動の状況		教育成果の状況		質の向上度
期待される水準を上回る		期待される水準にある		質を維持している
教育実施体制	教育内容・方法	学業の成果	進路就職の状況	
期待される水準 にある	期待される水準 を上回る	期待される水準 にある	期待される水準 にある	

### 生物生産学部・生物圏科学研究科（研究）

研究活動の状況	研究成果の状況	質の向上度
期待される水準を上回る	期待される水準にある	改善、向上している

### 注目すべき質の向上

#### 生物生産学部・生物圏科学研究科

○ 平成 25 年度に日本型（発）畜産・酪農技術開発センター、平成 26 年度に日本食の機能性開発センターを広島大学インキュベーション研究拠点としており、国際シンポジウム・セミナー等の実施により、海外機関との研究連携を推進している。また、特許取得数は、第 1 期中期目標期間（平成 16 年度から平成 21 年度）の合計 17 件から第 2 期中期目標期間（平成 22 年度から平成 27 年度）の合計 109 件へ増加している。

\*1 第 2 期中期目標期間の教育研究評価に関する評価報告書（案）の送付について（支学機構評企第 38 号 平成 29 年 3 月 2 日）で通知された内容を引用・一部加工し転載した。現時点では案であることに留意。内容に関して意見及び誤字脱字、事実誤認がないことを確認し、報告済み。

## 生物生産学部（教育）

### I 教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

#### 分析項目 I 教育活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 入学者選抜試験について、後期日程やアドミッション・オフィス（AO）入試において、アドミッション・ポリシーに沿った人材の獲得に配慮し、適性を判断するために、面接を実施している。

観点1-2「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 実践教育のために、中山間地域や島しょ部領域の地域社会と連携してその課題解決に取り組む、フィールドワーク型の授業を平成26年度から実施しており、学部生全員が履修している。また、中国・四国地区国公立大学農学系学部単位互換制度による「中国・四国地区連携フィールド演習科目」を実施しており、平成23年度から平成27年度において毎年度40名以上が履修している。
- グローバル化への対応として、海外演習や乗船実習（外航）を実施しているほか、平成25年度から実施しているAIMS-HUプログラムは、大学間相互に学生を政府派遣する制度として、カセサート大学（タイ）の4学部と連携し、1学期間の短期交換留学プログラムを実施している。また、研究者を目指す学生を対象とした研究者養成特別コースでは、毎年10名程度を欧米圏の大学等へ短期派遣している。

以上の状況等及び生物生産学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

#### 分析項目 II 教育成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 英語能力の向上のため、学生が一斉受験しているTOEICについて、平成25年度の入学者の成績は、1年次前期の平均458.8点から3年次後期の平均510.2点となっている。
- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）における食品衛生管理者、食品衛生監視員の資格取得者数は、50名から85名の間を推移している。

観点 2-2 「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第 2 期中期目標期間の就職率は、83.3%から93.8%の間を推移しており、主な就職先は、農水産分野の公務員、食品・農業関連の企業、環境関連の企業、薬品関連の企業となっている。

以上の状況等及び生物生産学部目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

## II 質の向上度

### 1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目 I 「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 実践教育のために、平成26年度から実施しているフィールドワーク型の授業を学部生全員が履修しているほか、「中国・四国地区連携フィールド演習科目」を実施しており、平成23年度から平成27年度において毎年度40名以上が履修している。
- グローバル化への対応として、海外演習や乗船実習（外航）を実施しているほか、AIMS-HUプログラムによる短期交換留学や研究者養成特別コースにおける短期海外派遣を実施している。

分析項目 II 「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第 2 期中期目標期間における食品衛生管理者、食品衛生監視員の資格取得者数は、50名から85名の間を推移している。
- 第 2 期中期目標期間の就職率は、83.3%から93.8%の間を推移しており、主な就職先は、農水産分野の公務員、食品・農業関連の企業、環境関連の企業や薬品関連の企業となっている。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

## 生物圏科学研究科（教育）

### I 教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

#### 分析項目 I 教育活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 外国人留学生の受入を促進するため、海外の大学で入試説明会を実施しており、海外の協定大学等とインターネットを活用した特別選抜試験を実施している。
- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）において、教育の国際化のために外国人教員4名を採用しているほか、テニユアトラック教員2名を採用し、多様な教員の確保に取り組んでいる。

観点1-2「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 食糧危機への対応に挑戦するグローバル人材の育成を目的として、平成27年度から英語で学位を取得できる専攻横断型特別プログラム（Sustainable Food Production (SFP) プログラム）を実施している。同プログラムは、日本人学生を含めた専攻横断型の総合カリキュラムでの教育を行っており、外国人教員による集中講義形式で行う「3専攻合同多文化セミナー」は、留学生と日本人学生合わせて20名が履修している。
- 海外学生との交流を促進し、学生の国際理解力を強化するため、研究科国際サマースクールや国際大学間ネットワークにおけるINU国際サマースクールを実施しており、研究科国際サマースクール参加者数は、平成22年度の8名から平成27年度の14名へ増加し、INU国際サマースクール参加者数は、平成23年度から平成27年度において28名から34名の間を推移している。
- 入学試験の成績や学術活動等において優秀と認められる学生に対して修学費支援を行う、エクセレント・スチューデント・スカラシップ制度において、社会人学生向けに特別枠を設定しており、第2期中期目標期間中に支援した学生数は、5名から9名の間を推移している。

以上の状況等及び生物圏科学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

#### 分析項目 II 教育成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点 2-1 「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学生の受賞は、第 1 期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）の合計23件から第 2 期中期目標期間の合計60件となっており、第 1 回日本学術振興会育志賞等を受賞している。
- 博士課程前期修了時アンケートにおいて、講義満足度については、平成26年度は 95%、平成27年度は93%が肯定的な回答となっており、修士論文研究の満足度については、平成26年度は88%、平成27年度は73%が肯定的な回答となっている。

観点 2-2 「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 平成27年度に実施した就職先企業等に対するアンケートにおいて、修了生の評価について、専門的知識・技能、チームワーク・協調性、論理的思考力の 3 項目への肯定的な回答が70%を超えている。

以上の状況等及び生物圏科学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

## II 質の向上度

### 1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目 I 「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 海外の大学で入試説明会を実施しており、海外の協定大学等とインターネットを活用した特別選抜試験を実施している。
- 英語で学位を取得できる、専攻横断型特別プログラム (Sustainable Food Production (SFP) プログラム) を実施しており、プログラムの共通科目として「多文化セミナー」を実施し、留学生と日本人学生が共に参加することで、国際的な交渉力の醸成に取り組んでいる。

分析項目 II 「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 学生の受賞は、第 1 期中期目標期間の合計23件から第 2 期中期目標期間の合計60件となっており、第 1 回日本学術振興会育志賞等を受賞している。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

## 生物生産学部・生物圏科学研究科（研究）

### I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

#### 分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 英文査読付論文は、平成22年度の151件から平成27年度の177件へ増加している。
- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）において、科学研究費助成事業の採択件数は39件から56件の間を推移しており、共同研究の受入件数は平成22年度の26件から平成27年度の45件へ増加している。
- 平成25年度に日本型（発）畜産・酪農技術開発センター、平成26年度に日本食の機能性開発センターを広島大学インキュベーション研究拠点としており、国際シンポジウム・セミナー等の実施により、海外機関との研究連携を推進している。
- 特許取得数は、第1期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）の17件から第2期中期目標期間の109件へ増加している。

以上の状況等及び生物生産学部・生物圏科学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

#### 分析項目 II 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、食料生産の先端的技術の開発、生物資源の機能解明と利活用、生態系保護及び生物資源の保持・活用、環境ストレスへの適応戦略に関する研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、植物栄養学・土壌学の「植物の耐乾燥性および耐塩性機構の解析と耐性の強化に関する研究」、食品科学の「消化管において作用する疾病予防成分に関する栄養学的研究」、水圏生産科学の「沿岸海洋生態系における動物プランクトンの機能的役割及びエチゼンクラゲの発生機序に関する研究」、動物生産科学の「反芻家畜乳腺の自然免疫機能に関する研究」等がある。
- 社会、経済、文化面では、特に水圏生産科学、動物生産科学において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、水圏生産科学の「沿岸海洋生態系における動物プランク

トンの機能的役割及びエチゼンクラゲの発生機序に関する研究」、動物生産科学の「ブタ精子保存、人工授精技術開発に関する研究」がある。

以上の状況等及び生物生産学部・生物圏科学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、生物生産学部・生物圏科学研究科の専任教員数は75名、提出された研究業績数は18件となっている。

学術面では、提出された研究業績16件（延べ32件）について判定した結果、「SS」は1割未満、「S」は8割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績4件（延べ8件）について判定した結果、「S」は8割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

## II 質の向上度

### 1. 質の向上度

〔判定〕 改善、向上している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間において、科学研究費助成事業の採択件数は39件から56件の間を推移しており、共同研究の受入件数は平成22年度の26件から平成27年度の45件へ増加している。
- 英文査読付論文は、平成22年度の151件から平成27年度の177件へ増加している。
- 平成25年度に日本型（発）畜産・酪農技術開発センター、平成26年度に日本食の機能性開発センターを広島大学インキュベーション研究拠点としており、国際シンポジウム・セミナー等の実施により、海外機関との研究連携を推進している。また、特許取得数は、第1期中期目標期間の合計17件から第2期中期目標期間の合計109件へ増加している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 動植物科学、水産海洋科学、食品科学の3領域を中心として、海洋水産資源の保護に関する研究、反芻家畜乳腺の自然免疫機能に関する研究、家畜繁殖技術の革新的改良、食品の安全性と機能性の強化に関する研究、植物の耐乾燥・耐塩性機構に関する研究等に取り組んでいる。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

## 2. 注目すべき質の向上

- 平成25年度に日本型（発）畜産・酪農技術開発センター、平成26年度に日本食の機能性開発センターを広島大学インキュベーション研究拠点としており、国際シンポジウム・セミナー等の実施により、海外機関との研究連携を推進している。また、特許取得数は、第1期中期目標期間の合計17件から第2期中期目標期間の合計109件へ増加している。



現況分析の方法（出典：独立行政法人 大学改革支援・学位授与機構 「評価実施要項」  
（国立大学法人及び大学共同利用機関法人の第2期中期目標期間の教育研究の状況について  
の評価）から部分抜粋）

○分析項目ごとの水準判定（教育）

「教育の水準」の分析項目と観点

分析項目	観 点
I 教育活動の状況	○ 教育実施体制 ○ 教育内容・方法
II 教育成果の状況	○ 学業の成果 ○ 進路・就職の状況

観点の段階判定の区分表

判定を示す記述	左記と判断する考え方
期待される水準	取組や活動、成果の状況が優れており、それぞれの学部・研究科等で想定する関係者の期待を上回ると判断される場合
期待される水準	取組や活動、成果の状況は良好であり、それぞれの学部・研究科等で想定する関係者の期待に当たっていると判断される場合
期待される水準	取組や活動、成果の状況に問題があり、それぞれの学部・研究科等で想定する関係者の期待に当たっていないと判断される場合

分析項目の段階判定の区分表

判定を示す記述	左記と判断する考え方
期待される水準	取組や活動、成果の状況が非常に優れており、それぞれの学部・研究科等で想定する関係者の期待を大きく上回ると判断される場合
期待される水準	取組や活動、成果の状況が優れており、それぞれの学部・研究科等で想定する関係者の期待を上回ると判断される場合
期待される水準	取組や活動、成果の状況は良好であり、それぞれの学部・研究科等で想定する関係者の期待に当たっていると判断される場合
期待される水準	取組や活動、成果の状況に問題があり、それぞれの学部・研究科等で想定する関係者の期待に当たっていないと判断される場合

「質の向上度」の判定区分表

判定を示す記述
大きく改善、向上している 又は 高い質を維持している
改善、向上している
質を維持している
質を維持しているとはいえない

## ○分析項目ごとの水準判定（研究）

（研究業績の水準判定の区分と判断基準）

学術的意義での判断基準

SS：当該分野において、卓越した水準にある

S：当該分野において、優秀な水準にある

A：当該分野において、良好な水準にある

B：当該分野において、相応の水準<sup>注)</sup>にある

C：上記の段階に達していない

注)「相応の水準」は、当該分野の専門家が判断して標準的な水準にあることを指します。

この水準を基準として、上位二つの区分（SS、S）を判断します。

社会、経済、文化的意義での判断基準

SS：社会、経済、文化への貢献が卓越している

S：社会、経済、文化への貢献が優秀である

A：社会、経済、文化への貢献が良好である

B：社会、経済、文化への貢献が相応である

C：上記の段階に達していない

分析項目	観 点
I 研究活動の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 研究活動の状況</li> <li>○ 大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況</li> </ul>
II 研究成果の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 研究成果の状況（大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること）。</li> </ul>

観点の段階判定の区分表

判定を示す記述	左記と判断する考え方
期待される水準	取組や活動、成果の状況が優れており、それぞれの学部・研究科等で想定する関係者の期待を上回ると判断される場合
期待される水準	取組や活動、成果の状況は良好であり、それぞれの学部・研究科等で想定する関係者の期待に据えていると判断される場合
期待される水準	取組や活動、成果の状況に問題があり、それぞれの学部・研究科等で想定する関係者の期待に据えられていないと判断される場合

分析項目の段階判定の区分表

判定を示す記述	左記と判断する考え方
期待される水準	取組や活動、成果の状況が非常に優れており、それぞれの学部・研究科等で想定する関係者の期待を大きく上回ると判断される場合
期待される水準	取組や活動、成果の状況が優れており、それぞれの学部・研究科等で想定する関係者の期待を上回ると判断される場合
期待される水準	取組や活動、成果の状況は良好であり、それぞれの学部・研究科等で想定する関係者の期待に応じていると判断される場合
期待される水準	取組や活動、成果の状況に問題があり、それぞれの学部・研究科等で想定する関係者の期待に答えられていないと判断される場合

「質の向上度」の判定区分表

判定を示す記述
大きく改善、向上している 又は 高い質を維持している
改善、向上している
質を維持している
質を維持しているとはいえない

第1期中期目標・中期計画期間（平成16年度～21年度）に関する現況分析結果（参考）

（出典：「広島大学生物生産学部 生物圏科学研究科 自己点検・評価報告書（第1期中期目標期間）平成16年度～平成21年度」平成23年4月から一部引用）

生物生産学部(教育)

教育の実施体制	教育内容	教育方法	学業の成果	進路就職の状況
期待される水準を上回る	期待される水準を上回る	期待される水準を上回る	期待される水準にある	期待される水準を上回る

質の向上度
大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

生物圏科学研究科(教育)

教育の実施体制	教育内容	教育方法	学業の成果	進路就職の状況
期待される水準を上回る	期待される水準を上回る	期待される水準を上回る	期待される水準を上回る	期待される水準にある

質の向上度
大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

生物生産学部・生物圏科学研究科(研究)

研究活動の状況	研究成果の状況	質の向上度
期待される水準を上回る	期待される水準を上回る	大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している